



人間牧場主・年輪塾々長
若松 進一

「伝統文化」と地域とのかかわり 〜地域のDNAを繋ぐ〜

私は昭和19年に下灘豊田という半農半漁の漁村に生まれました。今は西日本屈指の豊田漁港が出来ていますが、当時は港も石張り突堤が1本だけで、船は浜に係留する夏を除けば、毎日のように家族総出でロク口を回し陸に揚げたり降ろしたりして出漁していました。家の裏は砂浜と海が広がっていました。道路は唯一の県道も幅が狭く、離合するのもやっとなで、たまに大型車が対面すると道を下がる下がないで言い争いになって、駐在所のおまわりさんが仲裁に入る一幕もありました。わが家は代々漁師で、夏から秋にかけては協働の中着網で片口鯛を獲り、各々の家庭に分配された鯛を釜茹でして砂浜に長台とヨシズサナで干し、煮干しにして生計を立てていました。他の漁法で漁獲した魚は冷凍技術もないた

め、活簾に活かされ荷が揃うと仲買人の手配した生船という活魚運搬船で上方まで運ばれていました。家は三世代が一緒に暮らす大家族でしたが、家計は貧しくもお互い助け合い、今にして思えば長閑で幸せな時代でした。

そんな時を超え生活は便利になったものの最近では過疎化や高齢化の波が押し寄せ、いつの間にか漁村も世代交代が進み、一見進化したように見える社会の中で、過去の懐かしい昭和の暮らしを語る人は殆どいなくなり、生活や生産に使われた道具類も姿を消し、何が伝統文化なのかさえも分からない混沌の時代を迎えています。若い頃教育委員会で社会教育を担当していた時、廃れ行く民俗資料を保存しようと公民館で大がかりな調査収集を行いました。その数や千点以上を越えましたが、保存場所や活用方法まで知恵が回らず、それらはその後まるで古いゴミのような扱いを受け郵便局跡地、農協倉庫、廃校校舎などを転々として現在に至っています。そんな中であって長年漁師をしていた親父が、70歳で陸に上がったのを機に自分の記憶の中にある和船の模型製作を思いつきました。家の横の倉庫を改造してそれらの模型や資料を

展示する世にも珍しい海の資料館「海舟館」を私費で造りました。中には親父自らの網にかかって海底から引き揚げられた、旧日本海軍の戦闘機紫電改の機銃や魚雷のエンジン、ナウマンゾウの化石などを展示していますが、時たま訪ねて来る人に親父が口述で熱っぽく説明をしていました。伝統文化についていささかのかかわりを持っていたこともあって、消えゆく漁村の民俗資料を何とか保存したいと教育長を最後に退職した私も加わり、徐々に展示品を増やしてきましたが、8年前親父が他界して口述人がいなくなり、私が代理をするものの、親父ほどの経験や知恵もなく人の心を動かすような話も出来ず終いで、どうすれば伝統文化を親父のように遺し伝えることができるか考えた結果、昨年5月「人形100体が語る漁村の昔の暮らし」を思いつき、久万高原町に住む人形作家林智美さんに相談し特殊な紙粘土を素材にした人形の制作を依頼しました。林さんは農山村育ちゆえ漁村の昔の暮らしなど分かるはずもありませんでしたが、私の話と双海町誌を基に猛勉強し、約半年間で、漁村の暮らしを10のテーマ毎に製作してくれました。その模様は新聞で取り

示会を催したところ予想以上の反響を呼び、私の発想はさらに広がりが、今年の春からさらに100



漁村家庭の暮らし

上げられたこともあり、また私が会長を務める双海町史談会の協力を得て公民館祭りなどで展



人形108体漁村暮らし再現新聞記事

[愛媛新聞社提供]

「伝統文化」と地域とののかわり」地域のDNAを繋ぐの方法として

網を繕う人々、②港での仕事、③子どもの遊び、④半農半漁、⑤漁村家庭の暮らし、⑥五右衛門風呂、⑦井戸端会議、⑧餅つき、⑨酒盛り、⑩夕日への祈りでしたが、いずれも殆ど姿を消している場面再現となりました。200体を目指す続編100体は、⑪囲炉裏端の寄合い、⑫亥の子、⑬子どもの遊び・ハンカチ落とし、⑭盆飯風習、⑮漁村家庭の結婚式、⑯昔の小学校教室、⑰秋祭り神輿守り



漁村家庭での結婚式

は、①過去に先人たちが作って使っていた道具類を収集保存し展示する、②アナログ的な方法で写真や印刷物にする、③体験者の口実話を直接聞く、④資料を基にジオラマ化しリアルを再現して展示保存するなど色々な方法があります。私が始めた④の方法は人形や小物などを目に見える形で表現し解説している、ミニチュアでパッチャルながら受ける感動が身近なものとなるに違いありません。

問題は親父と私が共有できた昭和の暮らしを、私の息子というDNAにどう繋ぐことが出来るかです。「文化とは人間がよりよく生きるために考えを形にする営み」であるならば、私のこれからの役割が問われているようです。

「思い出や 資料を基に 紙粘土
 使い人形 作って再現」
 「すぐ隣 近所住んでた おじさんや
 おばさん時々 子ども登場」
 「懐かしい 漁村の昭和 語る人
 黄泉国旅立ち 忘れた記憶」
 「文化とは 人間よりよく 生きたいと
 思い考え 形へ営み」
 (若松進一 的笑売啖阿)